

# 北極大陸

ARCTIC CONTINENT

2015 JUL

無料  
FREE

不死の宴

栗林元

わが手は翼 われは鳥

弾射音

戦え! 宇宙キッドの作り方

murbo

8

# 不死の宴

## 第六回

(二) 常闇の系譜 承前

# 同じように

面とグローブを着けた者が四人、画面の左から入ってきた。全員、最初の人物よりは頭一つ身長が高く体格もがっしりとしている。カメラが少し寄ると、丸い体の線から**最初の小柄な人物は女性**であることがわかった。バランスの取れた体型である。

続きを読む

栗林元 Kuribayashi Hajime



## 第8回

アイアンザウルス  
デザスザート

# 戦え! 宇宙キッド

の作り方

murbo

続きを読む



信也は下に目をもどした。生徒たちはもうほとんどが、先生たちにはひきずりおろされたあとだった。逃げまわってブランコやすべり台に激突して、いるのもいる。何人かはプールに落ちておぼれかけていた。ふいに、真下から担任の先生がどなる声が突き上げてきた。

給食当番がどうのこうのと言っている。両腕両脚をひっしにばたつかせて頭に血がのぼりきってしまった信也には、何のことやらさっぱりわからなかつた。

続きを読む



薔薇の刺青  
栗林元

発売中!



<http://www.amazon.co.jp/dp/B00RQ5LMQ8>



弾射音

発売中!



<http://www.amazon.co.jp/dp/B00O5WSU7E>



# 8 わが手は翼 われは鳥

## 弾射音 Dan Shannon

14

信也は下に目をもどした。

生徒たちはもうほとんどが、先生たちにひきずりおろされたあとだった。逃げまわってブランコやすべり台に激突しているのがある。

何人かはプールに落ちておぼれかけていた。

ふいに、真下から担任の先生がどなる声  
が突き上げてきた。給食当番がどうのこう  
のと言っているらしかったが、両腕両脚を

ひっしにばたつかせて頭に血がのぼりきってしまった信也には、何のことやらさっぱりわからなかった。

信也は、先生を見ずにふたたび空へ目をやった。

黒いかげが、太陽の近くをただよっていた。哲郎なのか、鳥なのか、区別がつかなかった。

見まもるうちに、それは太陽の光の輪のなかにはいってしまい、信也はまぶしくて目を開けていられなくなった。

ほほの涙が太陽の熱にかわきはじめ、まぶしさに新しい涙がにじみはじめた。目をかたく閉じて、信也は上のほうへあごを突き出し、けんめいにもがきつづけた。

目を閉じたままでいると、きゅうにふしぎな感じがしはじめた。なにもないところをふわふわとただよっているような気分だった。

地面も、先生も、青空もなくなり、ただまっくらなだけだった。上のほうで哲郎がゆくりと遠ざかるのが感じられた。しかし、信也は奇妙な浮遊感にほとんどあせりを忘れてしまい、夢のような気分が哲郎に向かって力なく手を伸ばすことができるだけだった。

ふと目を開けると、地面がすぐ下にせまっ  
て見えた。

地面と信也のあいだに、先生の顔があった。

信也は天頂へ向かってあわてて空気をかき分けはじめた。しかし、落ちるスピードをわずかにゆるめただけだった。

先生が信也のくるぶしをつかんだ。

ツメが食いこんでくる。

ほかの先生たちが子供たちをひっぱたり、だきかかえたりしながら集まってきた。

信也はとっさに周囲に目をやった。どうやらまだ引きずりおろされていないのは信也だけらしい。

もうひとりの先生がもう片方のくるぶしをつかんだ。

「助けてよ！」

哲郎は大声で叫んで、哲郎の姿をさがし求めた。だが大空のどこにも見あたらなかった。

とたんにあせりがまたどつと出た。

両腕両脚がいつせいにあばれはじめた。まるで四本とも信也とはべつの生き物になったように、てんでばらばらにはげしい動きをはじめた。

わずかずつ、とぎれがちにからだがか上昇しはじめた。

右足をつかんでいた先生が両手で力いっぱい引っぱった。

とたんに何十センチも下がったが、腕と



脚がそれに反応して何倍も力強くあばれはじめた。すぐにまた上昇をはじめ、ふたりの先生が信也の足につかまったまま地面からはなれた。

先生たちをぶらさげたまま、信也は水平にふらふらとたまたまよった。

脚をめちゃくちゃに振ると、左足がきゅうにかるくなつた。

目を下にやると、先生がしりもちをついて顔をしかめていた。

まだ右足をつかんだままのもうひとりの先生が、下から信也をすごい目でらんだ。

信也はそのまま、わずかに上昇しながら横へ流れつづけた。脚を振るたびに、下で先生がぶらんぶらんと揺れた。

校庭全体から生徒たちの大歓声が上がっていた。

先生の腕をまんまとすり抜けた子たちが走りよつてきて、信也の足をつかんでいる先生にしがみついた。そのため信也はまた下がりはじめたが、二、三人の子が先生のすねにかみつくと、きゆうに解放され、その反動でいっきに上昇した。

子供たちの歓声がいっせいに大きくなり、青空と地面をまっぶたつに割ろうとした。みんな、飛びはねたり、両手を振つて、信也に声援を送っている。

やがて、最初に上昇したときの高さまで

あと少しというところまで来た。

ふたたび下を見ると、生徒たちが逃げまわりながらも、あつちでひとり、こつちでひとり、また先生につかまりはじめている。

空へ目を転じた。

そのまま太陽へ向かつて空気をかく。

両腕両脚から、すんと力が抜け落ちる。

もう体力をほとんど使いはたしてしまつたのだ。

信也はまた哲郎の姿を探した。

どこにもない。

呪文を思い出し、何度も何度も、のどがかれるまで大声でくり返した。

よけいに体力を消耗するだけだった。

やがてまた、ゆっくりと下降しはじめた。

信也はからだを水平にし、のこる力をふりしぼつて空中を泳いでいった。

わたり廊下の屋根の上を通りすぎて、裏庭に出た。

庭のすみにある小公園のおりの中から、鳥たちが信也を見ていっせいに声を上げ、あばれはじめた。

そのあまりのそうぞうしさに、信也の頭の中はごちゃごちゃに混乱しはじめた。

あせりがいっそうつのも、おしっこをもらしそうになつた。

力つきて、信也はこわれかけた裏門の柱

につかまつた。

あえぎながら必死に考えようとした。これからどうしたらよいか……しかし、頭は混乱しきつたままで、そのうえ心臓が強くあばれながら突き上げてくるので、よけいにあせるばかりだった。目がでたらめにあたりをさまよつた。ひなびた裏庭、うすよごれた校舎、花壇、鳥小屋、木のさく……そして青空。

ほんのみじかいあいだ、信也の頭からは、空を飛ぶということがすっかり抜け落ちていたようだ。空を見て思い出した。しかしそれは、一瞬、ありえないことのように思えた。だれでもない、ほかならぬ自分自身がついさつきまで宙に浮いていたことが夢の中のこのように感じられた。

まだ混乱していたが、頭のなかはもう静かだった。

いままでぼくはいったい何をしていたのだろう。

信也は考えをまとめようとした。どうやらいまはお昼休みらしい。給食前だろうか、それとも給食はとつくに終わったのだろうか。みんなはどこにいるのか。そして先生は……。

ひとつずつ、徐々に思い出した。

すべて夢かもしれないという思いがまだ心の底によどんでいたが、青空を見上げる

とそれを打ち消さずにいられた。なかった。

哲郎くんはたしかに空を飛んでいった。ぼくも宙に浮いた。

そして、全校生徒のほとんども。

数秒のあいだ、信也はふたたび空へ舞い上がるうか、それとも地面におりようかと迷った。

二度とできなくなるぞ……哲郎の言葉が頭の中にこだまして、のこっていた混乱がすべてふきとんだ。

信也はからだを上へずらして、なんとか飛ぼうとした。

しかし、門柱にしがみついたままの状態はどうやったらそれができるか見当がつかなかった。

おりの中では鳥たちがかたずをのんで信也を見まもっている。

いまや静まりかえった裏庭に、校舎をへだてて校庭のさわぎ声がかすかにたどってきた。

どれくらいしがみついていたのか、両腕両脚がひどくだるくなってきた。

信也はふたたび迷った。もういちど空を飛べるか、確信がなかった。ひよつとしたら、地面に足をつかなくても、門柱にしがみついて飛ぶのを中断したことで、もうだめになったのかもしれない。

一瞬ためらってから、思いきって飛び上がった。

だがその瞬間に、だめだ、という思いが心をかすめた。

……気がつくくと、地面に背中から落ちていた。

大の字にねころがったまま空を見上げて、しばらくぼんやりとしていた。背中がひどくいたんで、もう立ち上がれないかもしれないと思った。

ふと、空に黒い点が円を描きながら舞っているのが見えたような気がした。

信也は飛び起きた。

とたんにパニックが信也をおそった。

もう二度と飛べない……その考えは信也を恐怖のどん底へつき落とした。信也はあわててかけ出し、よごれたクツ下のまま校舎へはいった。

中はひっそりとしていた。

おもてのさわぎが壁に反響し、こだまが中を駆けめぐっている。

信也は階段を駆け上がった。

二階の窓からからだをのりだして空を見上げた。

太陽のほかにはなにもなかった。信也のからだはひとりで窓をこえて、とび出そうとした。

つぎの瞬間、信也はかたいものの上に押しつけられていた。

だれかが背中をひっぱったのと、どすんという音が全身をつき上げたのをかすかにおぼえていた。

かたいものは、廊下の床だった。



続く

# 不死の宴

## 第六回 常闇の系譜

### 承前

栗林元  
Kuribayashi Hajime

前回までのあらすじ

昭和十八年九月。民間の病理学者・如月一心は陸軍第九技術研究所・通称登戸研究所の招聘で長野県の上諏訪へ訪れた。「三号計画」と呼ばれる極秘の研究に参加するためだ。その日、登戸研諏訪分室では被験者第一号の上等兵が蘇生とともに獣化するという事件が起きる。一夜明け、研究所に向いた如月は、「三号計画」の全貌を知ろうとしていた。

同じように面とグローブを着けた者が四人、画面の左から入ってきた。全員、最初の人物よりは頭一つ身長が高く体格もがっしりとしている。

カメラが少し寄ると、丸い体の線から最初の小柄な人物は女性であることがわかった。バランスの取れた体型である。

四人と一人は、相対すると剣道のような蹲踞の姿勢をとった。そして立ち上がり礼をする。

小柄な女は、拳闘（ボクシング）のように両の拳を胸前に構え、左足を前にして、すっ、と立った。肩から力の抜けた自然体の構えで、武道の高段者のような自信があられている。

対する四人は、ばらばらっと、女の周囲を囲むように位置をとると攻撃に備えた構えをとった。右拳を脇に抱え左腕の前に立てた剛柔流空手を思わせる者、脇を閉め開

いた手を顔胸前に構えて軽く前傾した構えをとった者は柔道系であろう。後の二人は拳闘の経験者だろうか、腰を落とした武術系の構えではなく、左拳を前にしてぴょんぴょんと軽くフットワークを使つて位置を少しずつ動かしている。

自身も空手経験者である如月は息をのんで画面に吸い寄せられた。締め切った部屋の暑さも忘れていた。

女は、すーっと滑るような足運びで囲みの縁へ移動する。柔道家の方だ。両手で女の襟を取ろうとする柔道家の腕を無造作に掴むと軽く万歳をするように腕を振った。男の体が持ち上がり、ばたばたと両足が動く。男の体は天井に向かって大きく円を描くと、女の頭を飛び越して背後の床に落ちた。

如月はその投げに不思議な違和感を感じた。その違和感を考察するまもなく、拳闘家の一人と空手家が女に向かって両側から動

この物語はフィクションであり登場する地名・人名・企業名はすべて架空のものである。



いた。拳闘家の体を、すつ、とかわして女はその背後に回り、拳闘家の背中を押して、空手家にぶつける。遅ればせに近づくともう一人の拳闘家が放った右のフックを虫でも払うかのごとく左手で払い、払ったその手で顔を殴った。

面がずれるほどの強打で、拳闘家は膝が折れるようになりと背後に倒れ込む。女は、彼が後頭部を床で強打せぬように、男の服の胸ぐらに左手を伸ばすと掴んで倒れるのを止め、やんわりと床に倒した。

「左手一本、しかも一挙動でそれをやってのけた。」

女の背後から、もう一人の拳闘家と空手家が迫る。女は背後を見ることもなく、とんつ、と床を蹴ると大きくトンボを切った。天井にふれんばかりの高さで、飛び越された拳闘家と空手家は、動きを止めて頭上を仰いだ。

女の着地をねらって空手家が後ろ回し蹴りを出した。同時に拳闘家が女の退路を断とうと位置を変える。

女は蹴り間合いの内側に飛び込むと、蹴り足を背中でいなしながら、空手家の体を

肩に担ぎ上げ、右手で拳闘家に投げつけた。拳闘家は空手家の体を受け止めて後ろに倒れ込む。滑るよう近づいた女が二人の喉元に手刀を寸止めすると、二人は動きを止めた。勝負がついたのだ。

ノックダウンした一人をのぞいた三人と女が礼をする。面を外そうとした女を拳闘家が「だめだめ」とでも言うように制しているところつでフィルムが終わった。

公彦がカーテンを開けた。

「どうですか、ご感想は」と竜之介が言った。

「これは、体術とか武術以前に、あの女性の身体能力がとんでもないということがよくわかりました」

如月はそう言いながら、自分の感じた違和感がそれなのだ気づいた。武術や体術は、人間の体力で戦うために効率のよい力の使い方をとことんまで研ぎ澄ませたものだからこそ、相手の勢いなどを利用して重い人間の体ですら投げることができるのだ。しかし、あの画面の中の女の動きは、力も速度も人間の力を凌駕したものだ。それは、

「忍術映画のような、よくできたトリック

撮影かとも思っていました」

「撮影にはトリックは一切ありません。彼女はむしろ力を押さえますよ。相手を怪我させないようね」と竜之介が言った。

「すべての皇軍兵士があのようになれば、歩兵戦では無敵ではないですか」

竜之介はにっこりと笑うと、「彼らの運動能力や筋力は常人の五から六倍のようです。傷の治癒能力も高く、寿命も長い。私どもの記憶では、戦死した者以外で自然死したミシヤグチの兵はいません」

如月は、余りに現実離れた話に言葉もなかった。これは、「機械化」などの少年科学誌の未来予測記事なのではないか、はたまた「新青年」に掲載された空想科学物語なのではないかと思えた。

竜之介は、笑顔を引つ込め、「ただ、」と言葉を続けた。

「残念ですが、あのような力を得ると同時に、弱点も抱えることになるのです」

二人の会話をじやましないように、公彦が静かに窓を開けていた。緩やかに風が吹き抜け、室内の温度を下げていくのを確認すると、竜之介の隣に座った。

「弱点があるのですか」と如月は聞いた。

「ミシャグチの力を得た者は、通常の食事ができなくなります。また、日中は昏睡状態になり、日没後の活動しかできません。そのため、昔から、ミシャグチの眷属は忍び仕事や夜戦を担当していました」

「日中は起きていられないのですか」

「ええ、仮死状態のような深い睡眠状態になります。そして太陽光に当たると体の組織が急速に崩壊して、つまり燃えてしまうのです」

如月は一瞬息をのんだ。

そして、「食事というのは、」と聞いた。

「人間の血液ですよ」と竜之介が言った。

「それは、まるで」と言い掛けた如月に、竜之介が、「あのユニバーサル映画の魔人ドラキュラキュラではないかと」と言った。

「ええ」と如月は頷いた。「魔人ドラキュラ」

は昭和六年に日本で公開されたアメリカ映画で、日本にも怪奇映画の流行を生んだ映画であった。如月自身も子供の頃に浅草の映画館で観た記憶があった。

「ヨーロッパの吸血鬼・ヴァンパイアは、東ヨーロッパからアジアにかけての民間伝承が一七世紀から一八世紀に書けて西ヨー

ロッパに伝わったものと言われています。ただ、カトリックが広がったヨーロッパでは、彼らは異端の存在です。教会の力で既に一九世紀には完全に姿を消しています」

「日本ではそれが生き延びたと」

「ええ、日本は古代から八百万の神と言われるように多神教です。神の一種、または折口信夫のいうマレピト（稀人）の様な存在として容認されてきたのです。むしろ、積極的に利用してきたと言ってもいいでしょう」

「詳しいんですね」

「私たち守矢氏こそ、彼らを守って利用してきた一族ですから」

竜之介の言葉に合わせ、公彦がにつこりと微笑んで頷いた。

「長い間、ミシャグチ兵はひっそりと運用されてきました。もっぱらスパイ活動や夜

戦、暗殺などです。それは、このヴァンパイアの力の限界のためです。ただ、今回の大東亜戦争は日本と日本人が滅ぶか否かの大戦争です。この力を制御することができれば、戦局を挽回し名誉ある講和の期待ができません。そのため研究なのです」

「兄は、民俗学を学んで、過去のミシャグチ兵の研究をしています。如月先生には、医

学の面からミシャグチにメスを入れてほしいんです」と公彦が言った。

「確かに、吸血鬼伝説には、風土病や感染症を思わせる要素がある。噛まれて伝染するのは狂犬病を思わせるし、太陽光に弱いのは、光過敏症やアレルギー反応を思わせる」と如月が言った。驚きを越えようと、むらむらと好奇心がわいてきた。何より、如月の心をとらえたのは、世界で自分だけが取り組む研究だと確信が持てたからだ。足が震えた。

「この力は、どのように伝えるのですか」

「映画と同様に、伝えたい相手を噛んで血を吸うのです。その際に唾液によって感染します。インフルエンザのような症状が続いた後、相手は昏睡に入り一週間ほど後に蘇生します。その時にバンパイアになっています」

「やっぱりヴァンパイアと呼ぶのですか」

「ミシャグチの眷属には呼び名はありません。これに関しては、守矢一族でも口伝のみ伝えられていきまして文献はありません。彼らを呼ぶ際も、かれら、あのもの、などです。ですので、この計画ではヴァンパイアと称しています」



# 第8回

## アイアンザウルス デザスザート

# 戦え！宇宙キッド

# の作り方

「アイアンザウルス デザスザート」

アイアンザウルスは他のアイアンモンスターを同様に複数の場所で出現している。これは元になる動物などが同じ場合にありうることで、その場合であっても完全に同じ個体になることは無く、気候や動物の健康状態、年齢などによってアイアンモンスター化の折に形となって表現される。

アイアンザウルスは科学宇宙研究所付属博物館以外の場所でも出現している。某国の石発掘中の地域に出現した、アイアンザウルスはデザスザートと呼称されている。元になった化石の状態が良くなかったため、腕が不完全なまま小さく成形された。口には赤色光線銃。尻尾には12mm機関砲を装備している。光線銃は出力が低く射程距離も短いため、威嚇程度の能力しかない。

攻撃力低さを補うように頭部、胴体などの装甲は厚く防御力を高めている。

頭に衝角は無く、発熱対策の大型ラジエーターと排熱口が大きく取られている。

murbo





厚い装甲を持つ頭部。非力な体を守るために各部の装甲は強靭な仕様になっている。



頭部以外も発熱が高く、全体が高温になっている。この発熱によって電子頭脳が異常をきたし、嘔吐するように赤色光線銃レッドレーザーガンを乱射する。また、この異常によって妨害電波を放つようになる。  
体色はベージュと金属が剥き出しの部分は炭素繊維でコーティングされ、つやの無い黒に近いグレーになっている。

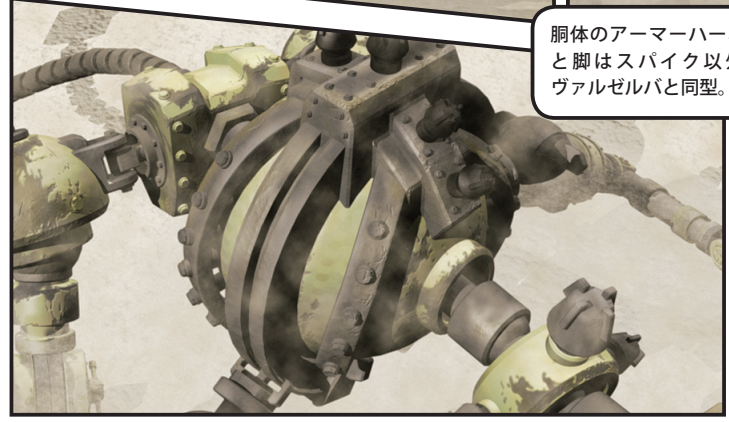
アイアンコアは胴体内に格納されている。腿のレシプロエンジンの出力はあまり高くなく発熱対策も採られていない。



腕はデザズガート独自の構造で簡易ながら打撃能力は過不足ない。



胴体のアーマーハーネスと脚はスパイク以外はヴァルゼルバと同型。



全長 / 18m  
体重 / 14.3t  
武装 / スチールフック x2  
レッドレーザーガン  
赤色光線銃 x1  
20mm 機関砲 x1

アイアンザウルス デザサザートは、アメリカ西部の砂岩や砂丘の広がる地域で化石発掘中の古代生物学者チームのベースキャンプ付近に出現し、キャンプを破壊している。襲撃後、デザサザートは自分の駆動による高熱で活動停止した。このアイアンモンスターから発生される妨害電波のためにキャンプからの緊急連絡は全て遮断され、この被害は誰にも知られることはなかった。

数ヶ月後、砂漠で暗躍する悪徳廃品回収集団によってデザサザートが発掘されて再起動する。この際に赤色光線銃に偏光レンズなどによる性能向上と、外部からの誘導装置の搭載など改造が施される。この再生デザサザートを使ってジャーゴンは砂漠の観光客や化石発掘研究隊などを襲撃するが、発熱問題は解決しておらず、再び高温による発狂とノイズジャマーの発生でコントロール不能になり、ジャーゴンごと襲撃する。

生き残ったジャーゴンからの救助信号を受信した科学宇宙研究所は飛行作戦司令室ジェットニグラで宇宙キッドと研究員たちを向かわせる。

砂漠をさまようジャーゴンたちは宇宙キッドたちと同行した国際警察に逮捕され、今回の事情を聴取される。

再生デザサザートは一旦、砂の中で活動停止していたが、突然再起動し、砂漠の中の簡易飛行場に駐留しているジェツ

# 熱砂の破壊獣

## 戦え! 宇宙キッド BURNING DESTROYER

トニグラを目掛けて攻撃を開始する。発熱によって滑走路のアスファルトは緩み、再生デザサザートはぬかるみにはまったように、中々足が進まない。そこについて攻撃するべきなのだが、再生デザサザートから発生する高温とノイズジャマーで簡単には近づけない。ノイズジャマーは通信機器だけでなく、人の頭も不快な気分させる能力があったのだ。空中退避するジェットニグラ。一旦ノイズジャマーの有効範囲から遠ざかり、宇宙キッドはダイザーベースで出撃する。太陽を背に降下する宇宙キッド。再生デザサザートは赤色光線銃を連射するが砂漠の砂埃と高熱により殆ど届かない。宇宙キッドも宇宙銃で応戦するが、霧のような砂によって効果は殆ど無かった。再生デザサザートのもう一つの武装、尻尾の先端にある「M3 機関銃」は実弾なので、これを乱射してきた。宇宙キッドは辛くも銃弾を交わしていくが、その間合いはほとんど縮まっていく。滑走路半ばまで追い詰められると砂嵐の影響も少なく、再生デザサザートは再び赤色光線銃の乱射を始めた。宇宙キッドは急上昇し、ジェットニグラから携帯型電磁加速砲を受け取り、急降下から一撃離脱で発射する。背の中から胴体を直撃し、再生デザサザートは破壊される。

これで今回の事件は一応の解決を見たが、デザサザートに襲撃され、まだ発見されていない人々の捜索、ジャーゴンによる兵器密売など隠されていた問題の解決はこれからである。







# 弾射音既刊本

## パッチワールド

人格シミュレーションとなった村田は独自の理論を実証するため、恒星間宇宙船を乗り取りヒューストンで実験を再開する。地球を破壊した謎の結晶体による地球再生の可能性を突き止める。……クリス・ボイスの名作『キャッチワールド』へのオマージュ。第一回 SF 新人賞候補作を加筆。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00O5WSU7E>



## クラフトロン 弾射音短編集 SF 編

「クラフトロン」…夫のテリーは旅先の地球で他の観光客もともととも消息を絶ち、私は軍人として捜索を命じられる。変異に地球は飲み込まれ、私はついにテリーの真実を知る……。他三篇。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MP4I8JE>



## 今度、死ぬことになった 弾射音短編集 ミステリ編

「今度、死ぬことになった」…私は大学時代の友人から、「今度、死ぬことになった」という文面の手紙を受け取る。そして死んだ。彼は恨みを持つ女のマンションに爆弾を仕掛けたと遺言を残す。……他二篇

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MOZXM22>



## 理由なき朝食 弾射音ショートショート集 Vol.1

夜中の三時、ママはぼくをいきなり起こす。真顔で朝食を食べなさいと言うのだ。パパとお姉ちゃんはパニックだ。そのうちに、みんなは泣きながら真夜中の朝食を始める……。他 24 編

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MUQJGT8>



## ぱおにゃん？ 弾射音ショートショート集 Vol.2

暇だったので、象と猫のハイブリッドを作ってしまった。巨大な象猫は元気に「ぱおにゃん！」と鳴く。妻は今すぐ捨ててきなさいと言う。ぼくはいったいどうしたらいいのだろうか？……他 24 編

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MW4ZC78>



## デイズ・オヴ・ホミサイド

殺人が犯罪ではない近未来。簡単に殺し合う人々。加藤芳雄はある日、吉田美枝子を地下鉄内で殺す。政府のコンピューター内に蘇った吉田美枝子は、逆に芳雄を殺そうと反撃に打って出る。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MKDQSLA>



## 彼女の手の中のバービー

彼女はいきなり僕の顔に化粧をした。僕は彼女の手で、どんどん女になっていく――美人女子大生と女装少年の、奇妙な愛のかたち。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWY6ISQ>



## レイルウェイ、ターミナル、そして故郷へ

僕は栢桶職人。ある日、大変なことに気づいてしまう。いどうるが手許にないのだ。人は、いどうるなしでは人は生きていけない。僕は、いどうるを取り戻すため、故郷へ向かって旅を始める。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00MKCJPR0>



## 栗林元既刊本

### 薔薇の刺青（タトゥー） / 自転車の夏

日本人と結婚して永住権を手にしたマリアンは、どこへ消えたのか。昭和六十年の名古屋市を舞台に、外人タレントプロダクション、偽装結婚、など、裏社会を描いたハードボイルド作品。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00RQ5LMQ8>



### 神様の立候補 / ヒーローで行こう！

西本は広告会社の営業。彼に下された使命は、新聞用選挙広告を法定回数五回分を全て東海新聞の抜いで獲得すること。ところがその候補者は、「龍神様のお告げで立候補を決意した」というおばあちゃんだったのだ。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00IB9F4OE>



### 1988 獣の歌 / 他 1 編

気がつくと、「獣」は新生児の心の中にいた。今まさに殺されようという瞬間だった。間一髪、肉体から抜け出した獣は、少女の心に飛び込んでいた。しかし無理な跳躍で、多くの記憶を喪失してしまう。他 1 篇

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00KK5I61U>



### 盂蘭盆会●●●参り（うらぼんえふせじまいり）他 2 編

18 歳を目前にした仁は「明日のお参りにはお前も来なさい」と、父から告げられる。話によれば長男は兄弟の中でも比較的早く「お参り」に連れていかれるのだという。果たしてそのお参りとはどのようなものなのか。他 2 篇

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00NCD05MK>



## murbo 既刊本

### 宇宙キッド 怪獣図鑑 魔人ゴース編

架空の連続 TV アニメーションである、宇宙キッドに登場する敵怪獣などをカード風のレイアウトで紹介する図鑑。

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EM4ST80>



### 宇宙キッド 怪獣図鑑 ドーモル団編

架空の TV アニメ、宇宙キッドに登場する敵怪獣のカード風のデザインで紹介する図鑑。第二巻

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00F0CFGVQ>



### 戦え！宇宙キッド 怪獣図鑑 超電子頭脳ズレイノウン編

架空の TV アニメ、宇宙キッドの敵メカ怪獣をカード風で紹介した図鑑。第三巻

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00HRW3ELG>



一枠 55mm x 55mm。  
一回料金 1,000 円  
年契約 10,000 円  
240dpi 以上の解像度、  
cmyk モードの  
psd フォーマットのみ受付けて  
います。  
詳細と受付は  
denpub@1001sec.com へ。

